

目次

卷頭言

鎌倉時代語研究の方法

小林 芳規

条件句構成の「雖」・「トイヘドモ」・「トイフトモ」について

田中 雅和

『江都督納言願文集』所収追善願文の文章構成について

山本 真吾

「時間の経過」を表す「オクル(送)」の成立について

青木 毅

中日漢語対照研究——「老若」を中心に

栞 竹民

和漢混淆文に於ける漢語「終焉」の出自に就いて

宇都宮啓吾

——「往生伝」を出自とする漢語の存在——

平安時代の儀軌訓読に於ける音義の利用

松本 光隆

——仁和寺藏金剛頂経一字頂輪王儀軌音義を中心に——

仁和寺藏一字頂輪王儀軌音義院政期写本 影印並びに翻刻

松本 光隆

唐招提寺藏『六大無碍義抄』二帖(一)

花野 憲道

——上帖影印並びに書誌的解説——

条件句構成の「雖」・「トイヘドモ」・「トイフトモ」について

田中雅和

目次

はじめに

- 一、和化漢文の「雖」字との関係から
- 二、名詞承接の「ども」「とも」と「トイヘドモ」「トイフトモ」を中心に
- 三、確定条件と仮定条件
- 四、仮定条件表現
- 五、仮定条件の内容と表現性
- 六、和化漢文における仮定条件の「雖」
むすびに

はじめに

条件文や条件句を成立させる表現形式は、いわゆる順接と逆接、確定と仮定とが、形態的・意味的に相互対応的である。条件として前置された文や句と後続の文や句とを、ある資格で相関させる接続機能を持つものが、品詞論的見地からは、接続詞と接続助詞である。本稿では、前置される条件句の句末に位置し、構文上それに続く後句と相関させる機

能を持つ「接続助詞」について、就中逆態接続の「ども」と「とも」との間に存する問題と、そこから派生的に考えられるいくつかの問題を中心に考察を加えたいと思う。

ある事柄が事実であったり、確実に存在しているものである場合、それを条件として表現したものが確定条件と呼ばれるものである。この確定条件の表現には、前置された条件句と後置された表現内容との接合において順態接続と逆態接続の両様があり、従って、順接確定条件と逆接確定条件という条件法の形式がある。そういう条件句形成の機能を担う接続助詞としては、活用語已然形を承接する順接確定の「ば」と逆接確定の「ど・ども」が基本的なものとしてあげられる。一方、ある事柄が事実でなかったり、未来に属するとか未だ諒解していない事柄である場合、それを条件として表現したものが仮定条件と呼ばれるものである。これもその前後の句の接合関係によって順態と逆態とに分けられ、活用語未然形を承接する順接仮定の「ば」と活用語終止形を承接する逆接確定の「と・とも」があげられる。これらの接続助詞以外にも、漢文訓読文系の文体においては、実質的意味を有さない「イフ」という形式用言を要素にもつ「トイヘドモ」と「トイフトモ」が一語相当の資格で、「ども」「とも」と同じ機能を担うことは周知のとおりである。つまり、逆態接続機能をもつもののうち、確定条件には「ど・ども」「トイヘドモ」が、仮定条件には「と・とも」「トイフトモ」が用いられることになる。しかし、これらの分類はあくまでも基本的な部分においてのことであり、現実的な言語表現においてその使用例の多少を問わなければ両者間には出入りがあつて、「ど・ども」「トイヘドモ」が仮定条件表現に、「と・とも」「トイフトモ」が確定条件表現に用いられることは、和文系文体でも漢文訓読文系文体でも既に先学の指摘があるところである。

ところで、仮定条件表現に用いられる語についてみると、逆態接続の助詞は前述のとおりであるが、順態接続の助詞は活用語未然形を承接する「ば」に限られると言つてよい。しかし、助詞に限らなければ、先学の論考によると、中古の文芸作品においては未然形承接の助詞「ば」が圧倒的ではあるが、訓点資料広くは漢文訓読文系の文体では副詞「モ